HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道学会へのおさそい
Author(s)	美土路, 達雄
Citation	北海道大学教育学部社会教育研究室報, 1977, 1-18
Issue Date	1978-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28597
Type	departmental bulletin paper
File Information	1977_P1-18.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本社会教育学会第24回研究大会（於北大）関連記事抄録

北海道学会へのおさそい

美土路　達　雄

今年の学会開催地が北海道に本ぎまりとなって、わたしたちは喜び、光栄におもい、そして緊張もしています。どう学会をおむかえしようか、と。

何といっても、わたしたち北大の社会教育研究グループが良い研究報告をすることが当番校の学会員らしい歓迎の第一のし方だ、と考え、おたがいに激励しあいながら取組んでいます。

それから、北海道の社会教育および同研究の現状をできるだけ学会に反映させたい、これが第二の願いですが、大学紛争で、主事講習を辞退して以来、公的社会教育の現場との直接交流はなくなっています。それで、これを何とか前進させ、あわせてわたしたちの研究も現場とのかかわりで発展させたいと考え、学会へむけて何回かの研究交流集会に取組んでいます。公開講座もはじめました。

それらの中間集約として、東北の学会員にもお願いして東北・北海道六月集会を計画し、そのメドもつき、これもうれしく期待しています。本学会会場の手配もつきました。

北海道は府県にくらべると何といっても地域社会の形成、成熟度が浅く、そこからくる特性は社会教育にもーよかれ、あしかれー反映しているようにおもいます。（道産子は大らかで、人情味豊かですが、変り身は早いところがあります。そんな状態に中央直轄的政治、行政が入りこんでいます）。

この学会はきっとそうした状態の北海道の社会教育実践にも大きな影響を与えるにちがいありません。北海道民の教育、学習権を保障し、住民自治を前進させていく本来的な社会教育への発展に力を与えるにちがいありません。わたしたちはそれにも期待をもっているのです。

どうか、大勢の学会員がおいで下さいますよう。汽車賃も宿賃も高くなりましたが。

北海道には北海道らしい社会教育実践があります。わたしたちの研究室の創設者、留岡先生が親子二代うちこまれた遠軽の家庭学校をはじめ、置戸の小さな図書館運動、知床の岬の近くの別海労農学習、苫小牧開発大型プロジェクトのなかでの学習運動、自然保護の運動、等々。なにぶん、東北六県に新潟県をあわせたぐらいの広い北海道ですから、全部御案内とはいきませんが、学会の翌日には、運河を守る運動や多喜二、伊藤整ゆかりの小樽と、原発問題のなかでオリジナルな原子力や公害の学習運動を展開している岩内の二ケ所に御一緒にエクスカーションしようと、スクールバスの予約もできました。岩内へいけば二〇〇カイリ問題が地域住民や国民とどんな切実な関係にあるか、それがヴィヴィッドに伝わってくるでしょ

う。車中の「学会」発表も力のこもったものができるとおもいます。

十月の北海道はぬけるような秋空の青のもとで、素晴しい紅葉が学会の皆さんをおむかえすることになっています。

いよいよ北海道開催が本ぎまりになったので、北海道の学会員と相談して、学会準備取組をひとまわり前進させたいと考えていますので、御助言や御希望を沢山およせ下さいますよう。

（北海道大学）

（日本社会教育学会『学会通信』64号）

『研究室だより』

北海道大学教育学部社会教育研究室

北大教育学部は、戦後創設期の学部長、**城戸幡太郎先生**の構想により、教育に対する実践と実証を重んずる独自の学風を培ってきました。また、一九六九年の民主的改革の中で講座制を事実上撤廃し研究グループ制をとってきています。この中で社会教育研究室は**美土路達雄教授**を中心に研究グループを組み、現在、農民教育と、いわゆる公的社会教育の二つの柱を重点に研究を進めています。

なお、学部内では、研究上、関連深い研究グループとして、産業教育、教育社会学、技術・職業訓練、社会福祉などの各研究グループがあり、相互に研究上の交流を深めています。また、全国でもユニークな産業教育計画研究施設は学部内研究センターとしてその役割がいっそう重要になっています。

研究室の研究課題のうち、農民教育は目下農業技術教育を中心に、その理論、方法を深め実証的に解明する取組みをしています。他方、いわゆる公的社会教育に関しては、当面、社会教育施設・職員論を中心に実態調査を進めその体系化を目ざしています。

研究室員一同、今年は、北大で日本社会教育学会が開催されることに、大いに刺戟を受け、現場との交流の場を拡大し、研究をさらに前進させる契機にしたいと張り切っております。このような考え方に立ってすでに現場の方々をまじえた研究会を数度持っており、さらに六月には東北・北海道六月集会を実現すべく準備を進めているところです。また、今年の社教ゼミの卒業生の中から社会教育現場に就職する者が出てきており、大変よろこばしく思っております。

なお、末尾になりましたが、社会教育の先達で当研究室の創始者の**留岡清男先生**が去る二月逝去されたことをお知らせし、先生の業績を偲びつつ慎んで哀悼の意を表したいと思います。

城戸・留岡先生の業績をどう継承・発展させるか、わたくしたちの責務は大きいと決意を新たにしています。

（山田定市）

（『学会通信』63号）

北海道大会をひかえて

学会札幌集会もあと一カ月、私たちはいよいよホーム、ストレッチと一生懸命です。

理事会や、会員の方との努力で、力のこもった報告が多彩にそろって、大いに期待しているのです。

学会を地方で開くということは一理事会は大変な苦労とおもいま

すが－地元にとっては大変な刺戟です。学会の直前に北海道の社会教育主事会の研究集会が北大で開かれることになりましたし、学会終了日の午後にはさっそく北海道社会教育推進協議会準備会が発足します。その際、留岡先生の居られた家庭学校や、置戸の図書館、別海の労農学習の実践報告もおこなわれる予定なので、是非御参加下さい。翌日は岩内エクスカーションと若手研です。

大学構内のもみじの葉の緑が少し紅らんできましたが、二〇〇カイリ問題、減反問題、有珠山の爆発等をかかえた北海道の社会教育関係はいま大変な課題と取組んでいます。

どうか学会の皆さん方にもそうした現場の生活と社会教育を親しく研究して載きたいし、又、御援助も戴きたいと、御出席を首を長くしてお待ちしています。ではお元気で。

（美土路達雄）

（『学会通信』66号）

北海道出身の会員からひとこと

「悲しきは、小樽の町よ　うたうことなき人びとの　声の荒さよ」と詠んだのは、他郷からやってきた啄木です。

「馬鈴薯の花咲く夕暮の農場に、ケンタッキー・ホームの歌ごえが流れる」と書いたのは、この土地出身の亀井勝一郎です。

北海道の広さ、内地との異質性はとても一口でいいあらわせません。ただ私の少年時代には人口二十万であった札幌が、戦後みるみる膨脹して百万都市になってしまったのには、何か快くない異和感を覚えます。小樽の町は、サハリン、沿海州、北朝鮮との交易がすっかり絶たれて、逆に人口減少都市になっています。

（倉内史郎－小樽出身－）

＊　＊　＊

北大の出だがあまり母校意識はない。ただあのキャンパスは忘れようにも忘れられない。寮もボロになったが、廊下に書いた落書はいまも健在だろうか。札幌というマチはきらいだ。しかし、北海道は好きでならない。私が育ったのは札幌でなくて北海道なのだから。いしをもて追わるるごとく出たふる里だったからよけいいとしくてならない。そこで研究大会が開かれるという。窓の景色をみながら気鋭の発表をきくのがまち遠しい。

（長浜　功）

＊　＊　＊

小生の郷里は、道北で過疎地だが、それだけに、北海道の姿を残している。数ケ所の村落は、崩壊して、平面としての広域行政が残っている感がする。そのせいか、広く見渡すことができるようになった気がする。急行列車が走っていると思ったら停車しない駅が増えたようだ。北海道旅行は、せっかちな人にはむかないと思う。人影のない寒い海岸や荒野にたって、ゆっくりと北海道をみてほしい気もする。

（本全力夫）

（『学会通信』66号）

廬山は煙雨

―北海道大会への期待―

碓井正久（東京大学）

若いころから、ずいぶんと各地を訪れまわってきたものだが、北海道を訪れる機会は、私にとっていままで皆無にちかかった。正確にいえば、二むかしちかい一九六〇年の秋のすえ、ソヴェトからの帰路、ハバロフスクで聞いた浅沼稲次郎氏のテロによる殺害の報に驚いて、大いそぎでナホトカから乗った船の、日本での目的地が室蘭であったから、北海道の地を一寸踏んだことも、あるにはある。しかし、室蘭から夜の汽車で函館に急ぎ、そのまま帰京したのだから、北海道の風物、印象といえば、津軽海峡を船で横切るときにみたイカ釣り舟の漁り火の見事さ、上陸してから行きあう日本の娘さんたちのいずれもの美しさ、二重窓の列車の外に感じる暗闇の冷気、といったところだった。いま大爆発して被害を与えつつある有珠岳につらなる山脈もみえなければ、北海道の原野、耕地の一端をもうかがうことができなかったわけである。だから、北海道は、私にとっては、始めての土地だということになる。

その後も、倉内史郎さんなどの、「北海道は広いんですよ、広いんですよ」ということばにひっかかったりして、北海道を訪れる機会を、逸しつづけてきた。逸するたびに、先だって逝去された留岡清男先生が、払い下げの電車を使って、御自身ヴァイオリンをひいて子どもと遊んでおられたという、あの北大のなかの保育所はいまもあるのだろうか。その留岡先生がかって『村づくりと人』（国土記）に画かれた村は、六〇年代、七〇年代の激動をどうやってたえきりひらいてきたのだろうか。留岡先生を助けて、遠軽の家庭学校に骨を埋めようとしている畏友谷正恒は元気なのだろうか。札幌の放送局にひっそくしたようにしている、卒業生のIとその家族たちは健勝なのだろうか。―などなど、北海道の人々の生活、風物が、しきりに想いのなかを横切るのだった。

誰の作だったかしら。若いころ好んだ

廬山（ろざん）は煙雨
漸江（せっこう）は潮
未だ到らざるに千船憂消えず

という漢詩がある。社会教育学会の大会というかたちで、北海道の人間、風物に接する機会を、ここに用意して下すった美土路達雄、山田定市両先生をはじめとする北海道大学の方々に感謝しつつ、私の心は、右の漢詩のようにはやっている。

こんどの社会教育学会の大会は、主催校である北大の社会教育研究室の学風ともおのずから関連して、農村、農民、農業問題に対する社会教育の対応をめぐっての問題が、あらためて根底から堀り起され、会員の関心の的になる機会になるだろうと、私などは期待している。さらに、その問題との関係で、過疎と社会教育の問題が、社会教育実践、研究の課題として欠落することのできぬ重要性をもつことも、会員のなかに意識されるにちがいないと思っている。

この問題にかんして、私などは、北大教育学部創始者の一人である留岡先生の、戦前の『生活教育論』から前述の『村づくりと人』にいたる一連の論稿から、ずいぶんと教えをうけてきた。留岡先生

の考えの底には、下敷きとして報徳仕法があるのではないか、留岡先生はそれを現代に生かそうとしておられるのではないか、という印象をもってきており、またその考えは現代の社会においても有効であろうと考える私などには、激動下の日本の農村の社会教育において、留岡先生の考えられた方向が、どのようにつらぬかれうるものなのかを、ぜひ勉強してみたいものである。また、過疎問題を、もはや概論としてではなく、社会教育における各論の問題として勉強してみたく思っている。

大会の場は札幌という大都市だが、幸にして北大では壮大な原野・浴野をみるエクスカーションの場も用意して下すった。その北海道の野に接して、前述の詩人がその詩の転結部に、

到り得、帰り来つて別事なし
山は煙雨
逝江は潮

とうたった如くにではなく、勉強してみたいと思っている。

（『学会通信』66号）

新理事会の発足にあたつて

会長　碓井正久

吉田昇先生のあとをうけて、これから二年間、本学会の会長の仕事を、私がおひきうけすることになりました。長いあいだ、副会長として、さらにこの四年間は会長として、たいへん精力的に、会の発展のために御尽力くださった吉田前会長の御苦労に対して、まず、あつく御礼申しあげます。

吉田先生に比べて、われながら無精な性に腹をたてることの多い、この私には、ずいぶんと荷の重い会長という仕事ですが、横山宏・津高正文両副会長、岡田忠男事務局長をはじめとする、新理事の方方と協力して、いまや教育学関連諸学会のなかでは、最大の規模を誇る学会の一つにまで発展した本学会を、いっそう盛りたてていく努力をするつもりでおりますので、どうぞよろしく御願いいたします。

北海道大学で開かれた第二十四回研究大会は、予想以上に多くの会員の参会をえて、成功裡に終ることができました。そして次期の大会は、ほぼ本年と同じ時期に、名古屋大学が会場をおひきうけくださって行われるはずになってきております。この、札幌から名古屋へ、というこれからの一年間、札幌での達成のあとをうけて、さらに社会教育研究が進展するような、てだてを考えていくのが、私ども理事会に課せられた第一の仕事でありますが、とりわけ、札幌の大会のなかで多くの方々が指摘されていた多くの問題のうち、たとえば、学会の量的な発展が研究の質の一層の向上に結実するように、社会教育における研究方法上の「カギ」概念の整理・定立という太いすじをめぐって、学会全体の研究の流れがきずかれていくように気を配らなければなるまいと思っています。もちろん、社会教育研究は、広く教育研究のなかでもとりわけ社会教育実践と深いかかわりをもってきました。だから、研究の上における概念の吟味・定立が、社会教育実践と、まるで縁のないものとして結実するよう

になることは困ったことになるわけでありますし、実践にすぐ役立つものとして研究がすすめられるだけでも、よい成果は必ずしも望めぬものでありましょうが、この研究と実践とのキズナを絶えず配慮しつつ、会員諸氏の研究がすすめられる御手つだいをしていかなければなるまいと存じております。（『学会通信』67号）

大会を終えて

美土路　達　雄（北海道大学）

北海道はいま積雪前のドンヨリした空の毎日をむかえています。あのハリつめた学会の数日も、もう二月前のこと、わたしたちはそれぞれ論文の作製と指導や、講義ゼミ、あるいは調査研究に忙しい日常生活へもどっています。

学会の北海道集会のときは、会員の皆さん、とくに理事会の皆さんには大変な御厚配や激励をいただき、ホントにありがとうございました。

北海道集会が成功で何よりでした。

多くの方々から、過分の評価をいただき、大変うれしくおもいます。

しかし、北海道集会で一番多くのものを得たのは実はわたしたちだったのではないか、とおもっています。

学会をおえて、一番つよく感じたのは、以来学生、院生のゼミがとても活発になったことです。学会の皆さんの報告と討論に啓発され、また各階層の交流のなかで自分たちの問題意識の位置づけに確信と誇をもつことができたのでしょうか。実際、学生、院生、とりわけ三人の研究生が独自のエネルギーを発揮して、バッチリ服務してくれたのはわたしどもにとって大きな喜びでした。以来、研究生もスッカリ学部の一員として教室の研究テーマに堂々と取組んでいるのは貴重な教訓でした。

また、学会前日の北海道社会教育協会のシンポジウム、学会翌日の北海道社会教育研究推進協議会の発足で、学会の学問的エネルギーはフルに北国の土壌に根をおろし、わたしたちの位置も課題も大変明確になりました。貴重な芽を育てていただきました。

ところで、北海道集会の理論的成果は何だったのか、北海道の社会教育関係から、こう問われることがありますが、これについてはわたしたちの研究の取組みの年輪の弱さの反省を率直に告白せざるをえません。下半期のゼミのテキスト選定のさい、ここ二、三年に公刊された社会教育論におたがいに眼を通したのですが、そのときもっと十分総括をしておけばよかったな、と話し合ったものです。

いま、北海道は下況下の大巾減反、二〇〇カイリ問題で激動期に入っており、わたしたちは学会討議に啓発され、決意を新たにしています。（同67号）

大学における社会教育職員養成と大学の機能

森口兼二

課題研究の第二室では、ふたつの発表を中心に討議が行なわれた。その概要は、つぎのとおりである。

(1) 私学における社会教育職員養成の問題　花香実会員（法政大学）

大学における社会教育職員養成については、社会教育職員の専門性の問題との関連もあり、本学会としても、従来から最も重要な問題として検討が続けられてきた。とくに、昭和五十一年度より碓井正久会員を代表者とする社会教育職員養成研究会が、文部省の科学研究補助金の交付を受け、その調査結果が「大学における社会教育職員養成に関する研究資料(1)、(2)」にまとめ刊行されたことは、大きな貢献である。けれども、この調査においても、私学における社教職員養成の現状と問題点については、なお十分明らかにはなっていない。花香会員は、法政大学における職員養成体制を報告されたが、多くの大学に共通する問題点が提起された。法政大学では、社会教育に関する科目は、文学部教育学科の専門科目として設置されているが、社教主事課程・学芸員課程の受講は、教育学科以外の学生にも受講料納付と登録によって開放されている。このため文学部とくに教育学科の事務負担が大きく、教官組織も不十分で専任率が低く、授業と現場の接触性に欠け、多目的資格の付与が、実質的な職員養成に結びつかない。委員会方式による全学的な対応システムを確立する過程にあるといえる。私学固有の問題の鮮明化も今後の課題といえよう。

(2) 東北大学大学教育開放センターの現状と課題　塚本哲人会員（東北大）

社会（成人）教育に果すべき大学の機能は、先進工業諸国の多くに共通する高等教育の在り方そのものに関する再検討に及ぶ重要問題である。塚本会員は、フランスの大学開放を、いわゆる「五月革命」を契機とする一連の新しい高等教育関連法に関係づけて説明され、東北大学の開放センターが、英米諸国などに比して発展の歴史に乏しいわが国の「大学教育開放」の理念と理論の確立に資する目的で設立された点を中心に、現状と課題を要約された。現状では、施設・職員・予算等の不十分さが推進上の課題になっているが、原助手の調査により、受講生の特性が明らかにされたことは、今後の大学開放に大きな示唆を提起している。（同67号）

研究課題
＊＊＊＊＊＊＊

「農村社会教育の現状と課題」の三つの報告と討議から

千野陽一

この課題研究テーマは、学会開催地北海道の社会教育の現状をふまえて設定されたものである。当日、山田定市会員（北大）、江田忠会員（山形大）、荒井邦昭会員（東大大学院）の三つの報告を中心に、①農村社会教育がめざす人間像、②社会教育行政のあり方、③農村社会教育の展望の三点を論議することとなった。

山田会員は、統計資料をゆたかに駆使しながら、大型機械化一貫

体系の農民的充用を基礎にして農業生産力の地域的・集団的形成が共同化という線で着実に発展してきている事実に注目したうえで、労農学習運動の到達点と課題を次のように指摘した。そこでは、労農学習運動の地域的発展と学習主体の農民・労働者・地域住民へのひろがり、学習内容の農政批判から地域農業発展の課題究明への深化などが到達点とされ、技術・生産力の発展に対応した農民の科学・技術的力量の向上、地域の担い手としての経済的・政治的力量の陶冶、住民諸階層との連帯のよりゆたかな創造（そこでの教育・研究労働者の役割の明確化）などが、今後の課題とされている。

江田会員は、昭和三五年以降の東北農村社会の変化を、山形県中心に農家戸数・農家人口の激減、兼業化率の飛躍的高まり、高令化・女性化のいちじるしいすすみ、生活様式における都市化の浸透、それらのなかでの共同体意識の稀薄化という線で、統計的にも実態的にも正確におさえたうえで、このような変化に対応しきれない公的社会教育の現状を、いたみをこめて指摘した。一方、荒井会員は、第一線で活躍する若手専業農民対象のきめこまかな実態調査をふまえつつ、農業経営者能力形成のモメントを、職業として農業を選びとる意欲の問題、農業の将来を見通す力の問題、人生観・生活観の問題、仲間集団形成の問題にしぼってマクロではあるが教育学的に分析したうえで、さらに経営者能力にくわえて、地域農業の主体形成に不可欠な力は何かを追求しようとした。

ところで、討論は、時間的制約もあり、①の人間像についての若干のほりさげにとどまらざるをえなかった。しかし、農村社会教育の課題と展望というさい、三報告からそれなりにゆたかな示唆をくみとれたことは大きな収穫だったといえよう。（同67号）

研究課題宿
****

「子どもの学校外教育」の北大学会討議から

土井洋一（大正大学）

今秋の日本社会教育学会（於北大）において予定されたこのテーマは、新潟学会以来のしめくくりの段階にあたり、当然の如く活発な討論を導いた。問題提起者として、まず、保田正毅会員（秋田大学）が「子どもの学校外教育研究の現段階と課題」と題して教育本質論の立場から包括的な報告を行なった。報告は、学校教育原論を踏まえて、領域・制度・内容・方法・主体等にわたり、基本的に重要な今日的課題を以下の七点に整理された。①学校外教育とは何か、②地域で育てる子ども像の探究、③子どもを育てる生活文化とは何か、④子ども組織の研究、⑤地域における教育環境の研究、⑥学校の再建と学校外教育、⑦地域の再建と学校外教育の次に、藤本浩之輔会員（大阪市立大学）が「都市化状況における子どもの問題点と学校外教育」と題して、地域環境の問題を重視し、都市化の進行に伴う子どもの側の深刻な問題状況とその克服の課題を整理された。最後に宿題研究の担当責任者である酒匂一雄会員（都立教育研究所）が、「地域の教育力の創造とその公的保障」の観点から全体のまとめにあたる報告を行なった。酒匂報告は、最後に教育主体としての父母住民の存在に注目し、その活動への援助と子どもの学校外教育活動の促進にこそ公的保障への糸口があると結んだ。

各報告者への活発な質疑が続いた後の討論では、保田報告をたたき台として藤本、酒匂報告の論点を含みながら「学校外教育」独自の価値、その制度化の重要性が指摘される一方、本質・内容論と切り結ばない制度化への危険性も強調された。しかし、学校教育、社会教育双方における課題もうち出され、総じて議論がかみ合うところまで至らなかったのは残念であった。その公的保障の課題についても、この宿題研究の特殊性（学際的でいくつかの問題領域にまたがる研究という意味で）故にか、社会教育が今後とり組むべき独自な課題としてのみ追究し難く、従って、共通の理解がなかなか困難な点も無視出来ない。

今後も原理、歴史、制度、外国研究など深めなければならない理論的課題が山積している。研究活動も継続されようが、会員諸氏の多面的かつ息の長い研究成果が期待される。（同67号）

各地で宿題研究に組織的なとりくみを

藤岡貞彦

北海道学会で、宿題研究の課題に「社会教育の計画と施設」をとりあげることを決定した。すでにこのテーマで、七六年学会の課題研究、ならびに七七年初夏、三ケ所の地域でひらかれた六月集会において、一定のとりくみがなされている。また、「公民館研究」、「都市化と社会教育」、「コミュニティと社会教育」などの先行する宿題研究の蓄積もある。おそらく二ケ年で達成される結果は、社会教育の当面する問題の総ざらいということになろう。

問題が大きいので、研究へのとりくみも組織的でなければならない。そこでぜひ各地域で、継続的に宿題研究にとりくむグループづくりをすすめていただきたい。社会教育にとって「計画」とは何か、実際に「計画」をどうたてているのか、それにそくして社会教育施設はどう配置されつつあるか、をまず近年の事実の問題として実証的に解明しつつ、原理的な問題にせまっていくというみちすじが予想される。各地域の特色を生かして研究をすすめ、六月集会に成果をもちより、二度の大会で全国レベルでの点検をおこないたい。東京近辺では、十二月十日午后二時から、国分寺市光図書館（電話〇四二五－七六－三九九一）で、第一回宿題研究会（東京地区）をおこなう予定である。

（研究担当理事）（同67号）

施設「合理化」の新しい局面をどうとらえるか

＜会教育の計画と施設＞研究の課題

社会教育施設「合理化」の進行にみる最近の特徴は、自治体行財政の「合理化」の強行策や、自主的な学習活動を封じこめようとする教育行政の展開という一面だけではとらえられない。住民の内側に、再編「合理化」を受け入れる状況がつくり出されていることが注目される。それだけに、住民の学習要求にねざした社会教育の計画化を自治体レベルでどのようにくみたてていくかの検討をぬいて、

施設のあり方を論じることはできない。

宿題研究にすえることをめざして設定された今回の研究討議は、この状況にふさわしくさまざまな問題提起にみちた三つの事例報告によってはじめられた。

公民館体制が全面的にコミュニティ・センターにとってかわられるというドラスティックな改革の行なわれた山形県鶴岡市では、すでに公民館に一般行政事務を委託して支所を廃止した行政「合理化」が背景にあったとはいえ、力量ある職員の配置がなかったこともふくめて公民館が独自な教育機能を低下させていたからこそ、住民はこの転換に反対せずむしろ期待をもってコミュニティ・センターを迎えたという。報告者の佐藤信一会員（東北福祉大）からは、三〇年間公民館は何をしていたかがあらためて問われているという鋭い指摘がなされた。

北海道からは、中心市街への集中が、高水準の大規模・機能別施設要求を生みながら、職員増員がむつかしい状況では、「総合センター」化の方向を許し、そのいっぽうで地域施設の無人化がすすむ現実が高倉嗣昌会員（北海道大学）によって報告された。

これまでも、「合理化」計画をつらぬく理念のあり方やその影響が分析されてきたが、住民が地域の社会教育の主体としていかに対応するかがいま問われている。東京・三多摩における公民館づくりの状況を報告した奥田泰弘会員（文化女子大）は、職員の研究活動の組織化と住民の学習を基盤にした施設づくり運動との結合が、地域の教育と文化全体を考える力量を生み出したことを分析し、藤岡研究担当理事からは「公民館でもコミセンでもよい」という形の官民協調的発想のひろがりにたいし、あらためて「コミュニティ」研究を深める課題が提起された。

（島田）（同67号）

理論研究部会の報告と討議

藤田秀雄

今大会では「社会教育の理論的課題は何か」をテーマに、最近の著作、論文を批判的に検討し、問題点を摘出する試みをおこなった。問題提起者は、大前哲彦氏が病欠で、朝倉征夫氏（早大）と水谷正氏（中野市）であった。

朝倉氏は、まず林部一二氏の生涯教育に関する見解について、①教育者と被教育者という関係で教育場面をとらえる方法に、学習者自身の創造性軽視のおそれがあり、②学校教育限界説や、③学習要求調査の恣意性に疑問を提示した。また、岸本幸二郎氏の主張について、各種学校の重視青年学級の職業教育化の見解を問題にした。結論として、これらは技術革新に対応した見解で、主権者として国民をとえたものではないし、こういう所論が、今日、小川利夫氏、藤岡貞彦氏の重視する地域教育運動論に対立しているとのべた。

水谷氏の意見は「現場」からの要望であって、①同和教育理論が弱い、②社教審答申などの検討不足、③実践のミクロ的分析の必要などをあげ、理論家が実践にかかわりながらおこなう理論活動の必要を主張した。

討論でまず問題になったのは生涯教育論である。安原氏は、これが実践場面ではひとつの役割を果しているのではないか、また、批判者の意見には、学校教育の遺産の社会教育への継承という点で弱いのではないかとのべた。諸岡氏は、外国の生涯教育論が朝倉氏の指摘するものでないことを主張した。碓井氏は、生涯教育論が学校教育限界説をみちびきだしているが、子どもの場合、学校教育と学校外教育とは並列でないとのべた。つぎに、小川氏は、今後の問題として、①用語のカテゴリーの明確化―たとえば、「現場」「生涯教育」「教育と学習」など、②学校教育と社会教育との関係を成長、発達段階に即して考え、内容・制度面にわたってつめる必要がある。③子どもの学校外教育法の必要をのべた。また、理論の客観性について、限界をみとめながらも調査を重視すべきだと、辻氏、吉川氏が主張していた。

（立正大学）
（同67号）

「社会教育学」会の提唱

佐藤千代吉（西南大）

たった四百字で大会雑感を書けという要求なので頂門の一針・あるいは、寸鉄肺腑を貫くというようなものを考えてみたが、私の悩裡に浮ぶものはない。しかしさすが北大での大会という場所がらか、全発表者の約四〇％もの北海道・東北の方々が主として農村における労働者・農民についての研究発表をされたのは、昔、教育が地域に奉仕した「北方教育」観を想起して、まさに圧巻であったと思う。生活の直接的要求に応えようとする社会教育の性格のためか、広義の方法、方策に関する発表は、いつものことながら雑多であった。しかしこれでよいだろうか。碓井正久氏は「講座・現代社会教育Ⅴ」の中で「社会教育の方法考察のための前提的視点」としてAndragogikの確立の必要について述べているが、現在、社会教育は原点に帰って、もう一度社会教育のなんたるかを原理的に追求し、そしてそれが学会プログラムのコアとなるような研究体制が醸成されなくてよいだろうか。

（一九七七・一〇・二八）
（同67号）

北海道大会を想う

塚本哲人（東北大学）

北大での本年度大会、それは私たちの研究室にとって、まことに想い出の深いものでした。若い連中が大勢参会させていただきましたし、そのうちの幾人かが会員の仲間入りをさせていただきました。これまでも本研究室出身で社会教育を担当しているものはだいたい入会していたのですが、今後はさらに数多くの連中が徐々に会員になることと思いますので、よろしくおひきまわしいただきたいと存じます。

それにつけても、六月下旬、今大会にさきだって開催された北大での北海道・東北研究集会において、美土路理事を中心とする北大

関係会員各位が示されたホスピタリティが、強く私たちを感動させたことを想いおこします。それだけにこの研究集会をこれから大事にしていきたいと希求しています。私たちもまた、新しい社会教育の科学の樹立をめざしています。今後の御教導を願ってやみません。

（同67号）

「大会雑感」

学会・北大会場を終えて

安田陽子

あの大きな楡の木はすでに葉を落とし、すっかり冬仕度に入りました。

学会を前後して社会教育研究会が北大で連日開催された。三者の関係を理解調整するのに仕事をしながらも、しばしば私は混同した。そうしながらも、学会から引続き、北社教（社全協・北海道支部準備会）を追いながら、社全協全国集会が北海道で開かれることを想定し、行動を順序立て、準備を進めた。

学会の前に開かれた「生涯セミナー」は社会教育協会が主催し、教育関係者と主事会との関連で、情報交換活動をしている。北海道で活躍している唯一の機関である。

北海道は中央から遠いなァ。と思いながら、社会教育をいつも眺めていた。地元ではあれも、これも、もっと、もっと。と。東北・関東以南の各地会場へ観光旅行をかねて出かけた。北海道の実情と似ている。いや違う。との感想だ。

北社協・推進準備会の通知が農協その他の農業関係者に多く送られたことはこれからの特色になろう。期待している。同様に福祉関係者にもその幅が拡げられることを考えている。

学会・北社協は大成功と評価された。参加者の費用と内容に重みができたことを喜びたい。北海道の自然もよかった。翌週末にはもう寒さが先立ち、落葉が構内を埋め始めた。冬へ急ぐのは自然界だが、そのなかに農作業も含まれる。

土地の地方の事情の再認と、会員の底辺拡大は同時に考えられる。学会遠足…北大バスが小樽に現れた。見なれた町並（木造・石造・ブロック・近代建築が旧問屋街と運河を生命とした倉庫群に商取引の中心だった銀行街、船舶関係の会社・官庁と北海製缶）とその翌史の重みを市民のものにするには。……旭天望台で小学生の遠足と一緒になった。私をみつけた姪は「どうなっちゃってんの？」。「大人の遠足よ。」天望台から見た街は人口十八万の港と海の地方都市であった。

岩内までの数時間と岩内漁協の人々が原発と闘っている生活問題やエネルギーに対する現実が境先生（水産高）の口調から伝わってくる。

日本海はもう荒い。白い牙をむいて人々に挑戦する。

（北大事務局担当）

（同67号）

研究室の底力

小林文人

北海道大会にはたしてどれだけの会員が集まるか、不安がないわけではなかった。しかし、ふたをあけてみると、東京で開催された前年度の大会に匹敵する盛会となった。発表・討論のなかみも充実した時間が多かった。そして、いろいろと楽しい話題が多い大会となった。北海道大学社会教育研究室の皆様に加わるかたちで、この大会の準備と運営にたずさわることができて、学会事務局（小林・土屋）も幸せであった。

北海道大会の成功疑いなしと直感したのは、六月末に開かれた東北・北海道六月集会のときであった。美土路達雄、山田定市両先生のなんともいいようのない心温まる指導性、それを縁の下から支える高倉嗣昌さんの献身的な努力、わかわかしい大学院諸氏のエネルギー、久しぶりに研究室の集団的なパワーをみた感じであった。

六月から十月にかけて北大社会教育研究室は大会準備（エクスカーションや前後の関連集会の準備をふくめて）に集中と緊張の数ケ月であったにちがいない。

それは単に会場設営の準備だけではなかった。美土路先生をはじめとして、大学院にいたる研究室のすべてのメンバーが研究発表され、会場の色どりだけでなく、大会プログラムをまさにけんらんたる内容にしていただいた。大会前日、会場設営の準備をおえたあとで、研究室に終夜あかりをつけて発表準備をしていた院生諸氏のあの姿を忘れることができない。木村、千葉悦ちゃん、藤田、柳田、小枝、それに安田さん、そのほか学生の皆さん、ほんとにお疲れさまでした。

（前事務局長）

（同67号）

若手研究者の会の報告

木村純（北大大学院）

学会北海道大会において、若手研究者の会では、従来の第一日目の交流会に加えて、初めての試みとして学会終了後に合宿学習会を実施しました。

第一日目は、ここ二、三年にはない多くの方に集まっていただき、各地域、大学ごとに若手の研究テーマや研究条件について報告しあいました。エクスカーション参加の興奮さめやらぬうちに、始まった合宿学習会は、美しい紅葉に囲まれ、日本海を臨む雷電温泉で行ないました。

合宿学習会の参加者は、大学教官と東大・筑波大・名大・京大・北大の院生・研究生・学生など一五名でした。宮原教育理論について著作集をもとに、青年教育など三つの報告をもとに討論しました。

私たち北大が準備した農民大学の実践を中心とする宮原先生の農民教育理論をどのように捉えるかという報告は、私たちの力に余り、準備も不足していたので、十分なものとはなりませんでしたが、三つの報告にわいた議論の中で、宮原先生の理論形成の過程や論争的

意義がわかり、学習意欲を刺激するものとなった感じております。

今後は、終了後の学習会は、若手研主催の理論学校として開催して、先輩諸先生にもお話ししていただき、より多くの若手会員の方に参加してもらおうということが、深夜の率直かつ和やかな議論の中から出されたことを報告しておきます。（同67号）

学生交流のつどいについて

河原厚夫（立教大学学生）

研究大会二日目、私たち学生は、学会はじめての交流のつどいをもちました。

社会教育を学ぶ全国の仲間と交流したい、各大学の状況を知りたい、という要求をどこかの場所でなんらかの形で実現できたらな、という願いが社会教育学会の大会で、学会員の諸先生方の暖かい激励により、かなえられたことは、学生にとってこんなにうれしいことはありません。

北は北大から南は京大まで、十七名の仲間が集い、それぞれの学んでいる内容、各大学の状況を報告・交換しあい、その後食事をとりながら楽しく交流しました。この中で、社会教育の幅の広さと深さを一同知らされ、各自の勉学を進めていく上でより大きな励みになりました。（同67号）

北海道の秋と社会教育

片山正夫

ストーブ、馬橇、雪祭、流氷、鰊場、アッシ織、黒百合、すずらん、あかしや、サッポロビール、ライラック、熊、トウキビ、牧草、サイロ、秋あじなど、思いつくままに北海道の風物を並べてみたが、これこそ北海道を代表するものだといえるものは見当らず、やはりこれら全体をまとめて北海道的といえるのかも知れない。北海道は冬が長く、春といえば五、六月をいうのだが、この時期になると、梅も桃も桜もライラックも一度に咲き乱れる。

夏、暑いなあと感ずるのは七月下旬から八月初旬のほんの二週間ぐらいであり、大雪山に初雪が降る九月中旬を過ぎると、あっという間にもみじ前線が下降し、山ぶどうが紫黒色にたれさがり、熊は冬ごもりの仕度をしはじめる。

ところで、北海道で一番よい季節はいつかと問われれば、人によってもちがいはあるが、私は秋とこたえたい。ほんのつかの間の秋であるが、作物がみのり、牧草が山と積まれ、レントコーンがサイロに切り込まれる。そして鮭は川をさかのぼる。

生れ故郷の川に帰るこの時期の鮭を秋あじといい、スジコをいっぱいはらんだつやのよい大型の秋あじは実にうまい。産卵後の鮭はホッチャレといい、木の皮をかむようで味がなく、熊もそっぽをむくという。

秋あじはうす塩にして焼いてたべるのが一番うまいが、そのほか、

ごしょいも（じゃがいも）、にんじん、玉ねぎなどといっしょに味噌煮にした石狩鍋も結構いける。鮭の玉子である大粒の柿色のスジコは温いご飯の上にのせてたべ、ごしょいもは蒸して白く粉をふいたものをバターをたっぷりぬってたべ、トウキビは畑からもぎたてのものをゆでてたべるのが一番うまい。

秋はまた、ビールのうまい季節でもある。ビールにジンギスカンもいけるが、本来、ジンギスカンには、ごしょいもでつくった焼酎が度がきつくさらっとして最も合うといわれている。

燃えるような紅葉の秋、あっという間に消え去っていく秋は、それ自体、私たちにとって貴重な教科書でもある。人間疎外の造幅機のような車のペダルへの倦怠から開放され、大原始林の連なる広大な北海道の秋を見きわめることは、人間であることの意義を十分考えさせてくれるだろう。

そして、すべての教育には、こうした大きなゆとりが必要であると思う。

（北海道教育委員会）

（『月刊社会教育』一九七七年十月号）

学会余燼

高倉嗣昌

北海道の方言に「ホッチャリ」という語がある。一生に一度の産卵を終ってすっかりいきおいがなくなり、味もおちた鮭のことであるが、北海道ではじめての社会教育学会、それも前後の行事をあわせると五日間におよぶ日程を終了したときは、実のところ「ホッチャリ状態」になり、もう学会のことを思い出すだにめんどうくさくて、余燼なるものにはなるべく近づきたくないという心境が強かった。

しかし、いくら私が避けてみても、学会に関する評判は直接関接に耳に入ってくる。以下、少数者のそれも伝聞によるもので不正確無責任な面もあるが、気軽に書いてもよい欄らしいので、「北海道における学会評判記」的なものとして書いてみたい。

いささか自画自賛的になって恐縮であるが、学会運営にたいしては一応成功との評価をいただいたようである。しかし学会そのものの中身の評価になると、「これを機会に北海道社会教育の裾野が広まった」、「はげみになった」、「滅多に会えない先生方のはなしを近く聞くことができてよかった」などの積極的評価があった反面、少なからざる消極的評価も聞かれたのである。

従来の道内学会員については、社会教育学会のペースというものをのみこんでいるせいか、不満、疑問、注文は少なかったが、はじめて学会に出席してみた人々（主に社会教育行政担当者）の声の中には、まことにきびしいものがあった。

その声はおおよそ次の四点ぐらいに要約されよう。

一、この種の学会における発表のパターンである「仮説の設定検証」のプロセスがきっちり位置づけられず、仮説があいまいで現状報告に留まったものや、検証が不充分な内容の発表が多かった。また討論の中身もしぼりきれず拡散化してしまったり、ときとしては末梢的と思われる問題に議論が集中していた。

一、どろどろした行政の現場の状況を充分整理せず、頭の中で考えた「制度論」から律していこうとする傾向が感ぜられた。その「制度論」も、どちらかというと守りの立場が強く、現実への適合性、発展性、創造性の側面が弱いのではないか。

一、われわれ行政における現場の人間がいくら一生懸命やっても、それはしよせん上からの社会教育としてかたずけられてしまい、学会には多くを評価してもらえないのではないか。

一、自由研究発表は時間が短かく、ベルトコンベアー化してしまった感がある。大変重要な問題指摘をしている発表もあるのだからその問題をほりさげるべく、自由研究発表の時間を延長する（課題研究、宿題研究の時間を短縮するなどしてまる一日あてる）ことを検討すべきではないか。

以上は、多分に断片的にみた印象や、誤解の上にたった見解である側面も否定し難いが、傾聴にあたいする側面が多いように思われる。

今まで少くとも表だってよせられなかったこうした意見が、この期にもたらされたことは、北海道で学会をやった成果の一つと考えられよう。そして、はじめて参加した人々に「実はあまり役に立たなかったよ」といわれたことこそが最大の余慮でもあろう。それは、これらの意見に学会が、学会員がどう対応していくのか、これらをいかにのりこえて、北海道における学会活動をモリあげていったらよいのか、という前途容易ならざる課題がなげかけられたことを意味するからである。

（『月刊社会教育』一九七八年一月号）

〃速報〃 北大に絢爛と開く日本社会教育学会

第二十四回研究大会

ことして第二十四回を迎える日本社会教育学会（会長吉田昇・お茶水大学）の研究大会が秋色が一入濃くなった北海道大学で十月八日、九日、十日の三日間にわたって開かれた。

ことしの夏の「南」で開かれた社全協第十七回大会につづいての「北」で開かれた学会であり、どれだけの会員が参加するかということが主催者はもちろん全参加者がひとしく胸の底に秘めた不安の一つであったことは否定できなかった。

しかしまた、北海道の秋ということもあり、とくに二〇〇海里問題や有珠山の噴火といったこともあって人々の関心はもう一つ高まっており、三〇〇名近かい会員が、南の涯沖縄県からの参加会員（恢聞するに旅費だけで九万円とか）を含めて陸続と集まって来た。

大会の第一日は理論研究部会であり「社会教育の理論的課題はなにか」というテーマで、朝倉征夫（早大）、中谷正（中野市公民館）の両会員の問題提起、藤岡貞彦、藤田秀雄会員の司会ということで始められた。朝倉会員は理論的課題ということで、社会教育をめぐっての現代化論、生涯教育論、学・社提携論、自己教育論などをとりあげ社会教育理論構築への批判的摂取をおこない、水谷会員は公民館長という立場から「現場」からみた現代の社会教育理論に迫ろうとし、「理論」への現場の期待をせつせつと訴えていた。

ついでこれらをめぐっての討論に入ったが、なぜか討論はかみあわず、ともすると「生涯教育論」批判といったあらぬ方向になり勝ちで会員の間にももう一つすっきりしないものが残ったことは口惜しいことであった。

第二日は自由研究発表で、第一室社会教育の理論と方法（司会辻功、藤田博会員）、第二室成人教育の国際比較（石堂豊、大蔵隆雄会員）、第三室社会教育行政（岩井竜也、横山宏会員）、第四室労働者・農民の教育(1)（井上英之、佐藤信一会員）、第五室労働者・農民の教育(2)（塚本哲人、布施鉄治会員）、第六室学校外教育（日高幸男、山口真会員）で総計三〇余点の研究発表があった。

とくに本年は、労働者・農民の教育をめぐっての労作、発表が多かったことで、これは開催校である北大に対する会員のエールといえるかも知れない。

個々の研究成果の紹介、評価はまた別になされるであろうが、総じて熱心な参加者と真摯な発表者がかもし出す独特の雰囲気は窓外に早くもちらつき始めている紅葉とともに社会教育研究の深まりと多彩さとを端的に示していた。

第一日の午後は課題研究である。いうまでもなく課題研究は日本の社会教育と学会がかかえている課題をめぐって自由に討議をするものである。

ことしとりあげられた課題は、㈠社会教育の計画と施設（司会島田修一、津高正文会員）、㈡大学における社会教育職員養成と大学の機能（司会森口謙二、安原昇会員）、㈢農村社会教育の現状と課題（司会千野陽一、美土路達雄会員）の三点である。

すなわち第一の課題は今日社会教育の現場をめぐってのもっともホットな課題であり、学会も六月集会以来グループをつくって研究を進めてきている問題であり、第二もまた学会が特別委員会を設け、さらには科学研究費の交付をうけて一年余にわたって調査・研究をすすめ、さらには積極的な具体的提案を試みたいとしている課題であり、第三は、北大が早くから取り組み数々の実績をもっているばかりか滅速体制下に入ったわが国が、あらためて再びなんとしてもとりくんでいかなければならないきわめて今日的な課題であることはいうまでもない。

つづいて大会は総会がもたれ、前年度の総括と新年度の計画などが協議されたが、会員数六〇〇に近かい「中型の上」規模の学会としての内実をともなったそれであった。

またこの席で新役員の選挙結果が発表され、新会長に碓井正久（東京大学）、副会長に津高正文（神戸大学）、横山宏（国立教育研究所）の各会員が選ばれたほか、三〇名を数える新理事が選出された。

ようやく暮色が迫まりポプラ並木をわたる風が一入秋を知らせる中で、北大側の心づくしによる懇親会が開かれた。全国から集まった会員が今日一日の、あるいはこの一年間の研さんの跡をふり返えり、久濶を叙し北海道名物のビールの杯を傾け、北大の学生諸君の熱演になる「ソーラン節」をはじめとする勇壮な太鼓にあふられ、みずからが唱する歌声にはげまされて楽しい一ときをすごし、なお飲み足りない人々はビール、ジンギスカン、そして二〇〇海里を偲ばせる石狩鍋を求めて秋雨に洗われた街へ散って行った。

第三日は「宿題研究」である。司会には土井洋一会員と吉田昇（前）会長が当たり「子どもの学校外教育研究の現段階と課題」ということで保田正毅（秋田大学）、藤本浩之輔（大阪市立大）、酒匂一雄（都立教育研究所）の三会員から問題提起があり熱心な討議が進められた。

この宿題研究はすでに組織された研究グループや研究会の地歩も固まっており、来年度にはそれらの成果をふまえて研究成果の発表（年報としての刊行）が予定されているだけに、その内容も充分準備され、充実したものであった。

とくにこの問題は今日の荒廃しきった子どもをめぐる諸条件をどうしていかなければならないかという今日的な課題と、学校教育と社会教育の接点というもっとも根本的な理論的命題をかかえており、その成果をひろく各方面から期待されているところである。

三日間にわたる大会はこうして幕を閉じたのであるが、ことしの大会にはもう一つの景品が用意されていた。

エキシビジョンである。すなわち大会を終えた翌日会員有志が北大を中心とする仲間たちの好意で小樽・岩内へのバス旅行を試みたのである。

小樽はかつて鰊と北方航路でさかえ、今日では文化財としての運河埋立をめぐっての住民運動がおこるとともに美しいボブラ、赤い屋根、数多い坂道は、小林多喜二、伊藤整を生み啄木の史跡を残している。

これに対して岩内町は原子力発電所をめぐって二〇〇海里問題当面の担い手である漁民が漁業協同組合に結集し、敢然と反対の闘いを進めているところである。

スクールバスはこれらのなまなましい現地を訪ね、美土路、山田、高倉そして境一郎会員の名ガイドと精かんそのものの漁協会長等との交歓によって、あらためて今日の日本と北海道を深かく心に刻みつけて清秋の北海道を去った。

（編集部）

（『月刊社会教育』一九七七年十一月号）